越橘庵隨筆

続性本草

川　崎　正　悦

前書、畏友、羊齒博士T氏が親草庵と云う庵号は私にふさわしくないと云われたので「越橘庵(エツキツアン)」と変更した。もう今後は容易に変えないつもりである。越橘はコケモモの漢名であるが、コケモモがなぜ私に、どんな関係があるかと云うと、私は高山植物を好きで、大正の始めから大分多くの種類を栽培して見たが、何十年やつても、さつぱり成功しない。ただハイマツとコケモモだけは近年どうやら安心して作れるようになつた。そしてコケモモはほんとに高山植物らしい姿で、私は大好きなのである。それに富士山の伝説に「徐福が秦の始皇帝の命を受けて我蓬萊山に不老不死の霊薬を求めに来たと云う話が伝つているが、蓬萊山とは富士山のことで、不老不死の薬は越橘である」と云うのである。それは蓬強附会の説に過ぎないであろうが、仮令それが子供だましのような話であつても、86才で富士登山を決行しようと念願している私にとつては嬉しいのである。そこで身辺にコケモモとハイマツをうんと茂らして、高山の趣きを漲ぎらそうと企てている次第で、親草庵は平凡だとT氏に云われた時即座に越橘庵と腹が決まつてしまつた。這松も好きだが、這松庵では一寸変だから。

次ぎに今回の続性本草であるが、前回性本草を書いたのは昭和30年であつたが、其後世間も益々漢方薬熱が高まつたようで、昨年10月の「週間東京」は漢方薬を大見出しで取扱つていて、その中の漢方強壮剤愛用者の中に、横山大観画伯、話術の徳川無声、歌手の淡谷のり子、随筆家の矢野目源一諸氏の名が見えている。私はそれに力を得て、続性本草を書いて見る気になつた。最近は又「漢方読本」その他続々漢方の本が発刊されている。本草であるから今回は薬用になる動物も含めることにした。

1. ク　コ　(枸杞)

12月頃、播州の大塩へ行くと小さなトウガラシのようなクコの実が小川の傍などに紅果累々と熟しているのは真に美しい。私は毎年のように、これを採つて来て、クコ酒を作くる、漢方では根皮を剝がして乾燥したものを地骨皮と云い、果実を枸杞子と呼ぶ。枸杞酒は強壮薬として昔から虚弱者に用いられている。其製法は、生の枸杞子5升を搗いて絹袋に入れ、酒2斗を加え約2週間密封し冷浸して造ると云うが、私はそんな面倒な事は出来ないから、クコの実を瓶の4分の1位入れ、それに酒か焼酎を注いで、その赤い綺麗な実を眺めながら飲む。漢方書に「枸杞酒は虚を補い、労熱を去り、肌肉を長じ、顔色を益し、健人をして肥えしむ」とある。私の作つた枸杞酒を飲んだ人であれはよくきいた、とあとで語つた人がある。葉も古来食用に供されたもので、枸杞飯などにも用いる。それについて又漢方書に「枸杞葉を以て羹(アツモノ)を作れば少しく苦し、俗諺に云う家を去ること千里にして蘿摩と枸杞とを食する勿れ、此の二物は精気を補益し、陰道を強盛にすると云う」とあるから男寡は食うべからず。食味評論家多田鉄之助氏の「媚味善哉」に次のような面白い話が出ている。「昔、中国のある町で中年の婦人が、よぼよぼの年老いた男の頬をピシヤピシヤ打つていた，通りがかりの人達は足を止めて、初めはこれを見ていたがあまりの仕打ちに見兼ねて一人の男が、その婦人の袖をぐいと引き、老人を虐待してはいけないね、どんな理があるか知らないが口で言えば判るだろう、老人はいたわつてやるのが当り前だ。と強い語調で言つた。するとその婦人は振り返つて、こう答えた。大きなお世話だ。何だつて、老人をいたわれだつて、お前さん方は何も知らないで口を出すものじやありませんよ、そりや此の男は見掛けは老人でしようが、実際は老人じやないんです、此奴は私の子供ですもの、ご存じないから話しますが、私の家では先祖代々家伝の不老不死の妙薬として枸杞の実を食べています。これさえ常用して居れば年なんかとりませんよ、こう見えても私は九十六才ですが、そうは見えないでしよう、処が、この子は皆さんから見れば年寄りでも、未だ七十二にしかならないのに老人に見えます。それは子供の時から枸杞の実を嫌つて、いくらやかましく言つても食べないからです、今日も腰が痛いと言うから、それじや枸杞の実をお上りと言つた処、又嫌だと言うので、あまり手前勝手ですから打つてやつたのです。親の言う事を聞かない子は一寸位ぶつてもいいではありませんか、と言つた。流石の中国でも、この親子を取り巻く群衆は、あまりにも珍奇な話を聞かされて唖然とする許りであつたと言う」と。同氏は又その「枸杞の実の伝説」の項で、「我国でも枸杞ブアンは随分多いらしく、東京には枸杞の実会があつて同

志相集つてこの霊薬の効能を楽しんでいるらしい」と書き、多田氏が九州のある都で強壮料理の試食会を開いた時、枸杞の実の効能を話して、これを料理に加えた処、その料理を食べた人が、翌日「あれは大した効能ですね」と言つたと結んでいる。

2. ナルコユリ　(黄精)

和名のナルコユリは鳴子百合の意味で、細長い風鈴状の花を、宛も鳴子を掛けたようにつけるから名付けたものである。張華の博物誌に『昔黄帝が天老に「天地の生ずる処のもので、食へば不老を得るものがあるか」と問うに対し、天老は「黄精という太陽の草があつて、これを食へば長生し得る、又鉤吻という草があるが、これは食つてはならぬ、口に入れると直ちに死する」と答えた』とある。然し白井光太郎博士は黄精はナルコユリでなくクルマバノオウセイであると書いている。

黄精は本草綱目に「中を補い気を益し、風湿を除き、五臓を安んずる。久しく服すれば身を軽くし、天年を延べ飢を感ぜぬ」とあり、又「五労七傷を補し、心、肺を潤す、単服するには9回曝して用いる。これを食すれば顔色の老衰を防ぎ、穀食を断ち得る」ともある。私は9回も繰り返すのは煩に堪えないから煮るのを3、4回で止めたが結構食べられた。初め鍋に水を入れて置き、ナルコユリの根茎を適当に切つて入れ、煮え立つたら鍋を下ろして、根茎を取り出してざつと乾かし、また其の煮汁の中に入れて煮る、これを繰返えすこと3、4回に及ぶと根茎も汁もだんだん甘くなる。抱木子に「黄精は凶歳には老人幼児の代用食になり、それを米哺と呼ぶ」とある。但し黄精には梅実を忌むと云う。食するには初秋の頃がよい。刈米博士の邦産薬用植物にも滋養強壮薬と出ている。

3. アマドコロ　(威綏)

地下茎が野老(トコロ)に似ていて、甘いからアマドコロと云う。前のナルコユリによく似た草であるが、茎が円くなく方形である。瑞応図に「王者礼備はるときは威綏殿前に生ず」とあり、李時珍は「脾、胃の虚乏、男子の小便頻数、失精一切の虚損に主効がある」と書いている。又鹿が好んで食う9種の解毒の草があるが、この草もその中の1種であるとも書いてある。薬用植物図譜に「根茎を乾燥したものをイズイと称し、直径1CM内外、円柱形のものである。漢方で強壮薬とし、血色をよくするに用いる。1日量10瓦内外を煎用する。秋期葉が黄色になつた頃根茎を掘り取り、水洗し細根を取り去つて陽乾しにする。」

4. チヨウセンゴミシ　(五味子)

享保年間に朝鮮から種子を伝えたので朝鮮五味子と云うが、日本にも自生がある。五味子とは其実の皮と肉とは甘酸で核は辛苦、其全体には鹹味があると云うのだそうである。モクレン科の植物で、同科のマツグサに似ているが実が赤い。本経上品に「五味子は気を益し、労傷ルイ瘦に不足を補し、陰を強くし、男子の精を益す」とあり。千金月令には「五月に五味子を常に服すれば、五臓の気を補し、盛夏と夏末に、体力が衰え気力が発動せぬ場合には麦門冬を与え、少量の生黄蘗を加えて湯に煎じて服ませると、その患者は精神頓に加はり、両足の筋肉が湧出する」とある。又抱朴子には「五味は五行の精で、その子には五味がある淮南公麋門子は16年間これを服して顔色玉女の如く、水に入つても霑(ウルオ)はず、火に入つても灼けなかつた」とあるが、そこまで行つては如何に五味子が霊薬でも贔負の引倒で唖然とするより外はない。まだある、千金方に「陽事不起には、新五味子1斤を末にし、1日3、4回酒で方寸匙を服するとよい、但し猪肉、魚、蒜、醋を忌む。1剤を尽く服すれば100日に亙つて10女を御し得る効がある」と書いてある。これも、これはこれはと驚歎するより外にない。邦産薬用植物に「北五味子は成熟せる果実を採集し乾燥せるものなり、本品は暗赤色又は暗紫色を呈し屢々類白色の粉層を被り、著しく皺縮し質は柔靱にして内に2個の種子を蔵す。本品には酸臭あり、酸味強く稍甘し。漢方、北五味子は専ら強壮並に鎮咳薬とするとあり、又近効方には「婦人の陰冷には五味子四両を末にし、口中の唾液で和して、兎屎大の丸にして用いるとよい」と書いてある。

5. メハジキ　(益母草)

メハジキと云う名は子供が其茎を短く切つて、まぶたに張つて眼を開かせて遊ぶからだと云う。益母草の意味は、婦人産後の止血、補精薬にするからである。メハジキはシソ科に属する1年草で、原野に生じ丈の高いものは1米半にも成長する。一寸ヨモギに似た草で、夏紅紫色の唇形花を葉腋に着ける。漢方では花の頃全草を乾燥したものを益母草と呼び、強精薬に用いる。その効については漢方書に「目を明かにし、精を益し、水気を除き、目を治し、熱を解し、気を順にす。女人経脈崩中帯下、産後胎前の諸病を調え、久しく服すれば人をして子有らしむ」とある。

久保田、中島両氏の研究に依れば、葉にはレオヌリンと云う結晶性の物質を含んでいて、このレオヌリンは兎の子宮に対して著しく緊張性を増し、又子宮運動の頻度を増加すると云う。産後の止血、補精薬としては、1回量4～6瓦を煎剤とする。(邦産薬用植物)

6. アカネ　(茜草)

昔茜染に使用したのは此草の根である。生の時は殆

んど黄色であるが乾燥すると赤色になる。漢方ではその根を用いる。漢方書に「久しく服すれば精気を益し、身体を軽くする。又六極、心、肺を傷め、吐血し、鴻血するを治す。鼻洪、尿血、産後の血運、月経不止、帯下、撲損瘀血、泄精、痔瘻を止め、膿を排す。酒で煎じて服す」とあり、又李時珍は「経脈を通じ、骨節の風痛を治し、血を活し、血を廻らす。茜根は色の赤いもので、気は温、味は少し酸くして鹹を帯びている。色の赤は営に入り、気の温は滞を去り、味の酸は肝に入り、鹹は血に走る。故に手足の厥陰の血分の薬であつて、血を廻らし、血を活すを特長とする。婦人の経水不通を治するに、これを用いるには、1両を酒で煎じて服するが1日にして通じ甚だ効がある」と書いている。血で血を洗うと云うと悪い意味だが、これは赤い薬で血を治すとは面白い。

7. ガガイモ　(蘿摩)

漢方で用いるのはその種子や葉であつて、種子を蘿摩子と云う。日本では各地に産するが殊に長野県から多く産する。ガガイモのガガは実はカガで東北地方で母親の方言、ガガイモの茎を切ると白い汁が出る、それを母親の乳に見たてて、カガイモとしたものだとは牧野富太郎博士の説いた処である。ガガイモの種子には、白色の毛があり、熟すると風に従つて飛ぶ、その毛を綿の代用として、針挿、印肉に用いる。本草綱目に「虚労、精気を補益し、陰道を強くする。葉を煮て食う。効力は子(種子)と同じ、極め虚労に益あり。蘿摩4両、枸杞根皮、五味子、柏子仁、酸棗仁、乾地黄各三両を末にし、1日3回、方寸匙ずつを酒で飲む」とあり、李時珍は「汁を取つて丹毒赤腫、及び蛇虫の毒につければ直ちに消する」と述べている。邦産薬用植物には、漢方、蘿摩子及び葉を強精薬とする。と出ている。

8. ヤマノイモとナガイモ

ヤマノイモは一名ジネンジョウとも云う。ヤマノイモの漢名に、薯蕷又は山薬を当ててある本が多いが、山薬及び薯蕷はナガイモの漢名である。ヤマノイモとナガイモは別種で、ヤマノイモは中国にはない。然し現今市販されている薯蕷とか山薬と呼ばれる漢薬は、ヤマノイモである。両種の一番分り易いのは茎の色で、ヤマノイモは緑色、ナガイモは紫色である。ツクネイモ、キネイモ、イチヨウイモ、ダイコクイモ等は皆ナガイモの園芸変種である。薬用のヤマノイモは千葉県印播地方、長野県産のものが品質がよいそうである。漢方では、山薬は専ら強壮薬、祛痰薬に用いる。民間では夜尿症、遺精、盗汗などにも用いる。山の芋は強壮薬として昔から有名でありながら、平常家庭でもトロロ飯などにして食べているので、あまり強壮薬などと云う意識はして食つていないが、東京には昭和の中頃まで「むぎとろ」の看板を出した店が方々にあり、上野池の端の割烹「揚だし」で「むぎとろ」を食つて吉原へ出掛けると云う人が相当多かつたと云うことでも分かる。

前にも述べた「媚味善哉」で多田氏はこう書いている。「山の芋を強壮薬の目的に使おうと思うならば、料理法に制約がある。一番簡単なのは卸して用いるトロロである。作り方は山の芋をスリ鉢で卸して、三倍位のツユに延ばし、焼青海苔を揉んで少々掛けて用いる。ツユは鰹節の出汁に醤油1割とミリン少々を加え味の素でうま味を附けて一沸して使う。又、昔から焼いた山の芋が効力があると云われているが、これは熱灰で焼くのがよい。やり方は山の芋を水で洗つて水分を拭きとり熱い灰の中に埋めて、中心まで火が通つたら皮を剝いで六七分の長さに切り、味淋4、酒1位の割合のツユを鍋に入れて、焼いた山の芋をその中に加えて煮る。ツユは材料が被る程度でよいが、このツユが煮詰つて無くなる頃に薄い塩味と味の素で調味すると美味な強壮料理になる。又、卸金で山の芋をおろし、摺り鉢に移してなお擦り、葛粉を少々加えてよく混ぜ合せてツナギとする。そして左右の手に箸2本宛を持つて、両手でその箸を操作し、4本の中心に山の芋を丸めて、その側に揚油を入れた鍋を火に掛けて置き煮立つたら、山の芋の団子を落して揚げ、紙で油を取つて椀種にしてもよいし、そのまま天ツユか、塩と味の素で味附けして用いてもよい」と、猶多田さんはこう続ける「山の芋は、単に煮て用いるだけでは効力がない、中国では粥にするを宜しとしている。我国でも、平安朝の頃にイモ粥は大いに尊重されていた。経務方という本に山薬粥というのがある。山薬粥と云うのは、餅米を一晩漬け込んで置き、山の芋、又はナガイモはよく炒つて砂糖と胡椒を加えて煮ると腎精を補うに特効がある。不能者には特に効がある」、此の文にあるようにヤマイモとナガイモの効力は殆んど同じであるらしい。然しムカゴは美味であるけれども、精力増進には大きな効果がない。多田さんは又こうも書いている。「山の芋の効力は著しいが、その親類筋のヤマトイモにしても仏掌芋にしても同様に相当な効力のある事は明らかであるから、この種のものを用いればよい、なお分析表に依ると栽培品の方が蛋白質の含有量が遙かに多いし、その他脂肪、含水炭素の量は皆同じであるし、無機質も同様と見ていいが、さて、用いて見ると自然薯の方がよいのは分析の数字のみでは判らないものがある」。

9. イヌホオズキ　(竜葵)

イヌホオズキの全葉を乾燥したものを漢方で竜葵と

云う。全草中に極少量の瞳孔を開く作用をするアルカロイドを含有し、又果実には、ソラニン、及びサポニンを含む、漢方では全草を解熱、利尿薬とし、又疲労を医し睡を払う薬として用いるが、有毒であるから注意を要する。茎葉を煎じて用いれば陰萎及び催婬の効を奏すると称せられ古代は媚薬に調合されたとのことである。

10. ホオレンソウ　(菠薐)

ホオレンソウは平常どこの家庭でも食用としているので、鉄分やビタミンAを多く含む位しか一般には知られていないが、薬用としては、古来から補血強壮、陰萎、リウマチス等にも用いられて来た。

11. ホオキギ　(地膚)

薬用としては、ホオキギの子実を11月頃採集して日干にする。これを地膚子と云い、味は甘苦い。漢方では強壮薬しとて陰萎に用い又利尿薬として水腫、淋疾にも用いる。用量は1回1～2瓦。

12. トウキ　(当帰)

トウキは我国の各地に産するが北海道、及び奈良県から多く産する。トウキには特異な芳香と辛甘味を有する。トウキに含んでいる油は大脳の鎮静、延髄諸中枢の興奮並に麻痺を起す作用がある。漢方、当帰は補血及び婦人産後の薬とし、又鎮静剤に用いるが、応用としては、ヒステリーに用い、猶芳香、苦味を有する為め興奮剤として、性慾昂進を促すにも用いる。

× × × × ×

最初に今回は動物も書くと書いて仕舞つたので、どうもここらで動物の方面にも触れなければならぬ仕儀に立至つた。それで植物の続きだから植物のような名の淡菜を取上げて見た。

1. ミルクイ　(淡菜)

ミルクイは軟体動物門の弁鰓綱、バカガイ科に属する。薬名には淡菜のほか、殼菜、又は西施舌などがある。西施の舌とは面白い、淡菜とは又どういう処から名付けたものか、薬用には、このミルクイの水管を用いる。性的増進剤として一般に知られ、陰萎、遺精等に有効とされている。これも「媚味善哉」にRさんの話として、次のような記事が載つている。「一流会社の重役である丸屋久作は40才を越した計りで、不思議な熱病に悩んだが半年の闘病生活で、漸く恢復した。然し性慾は全然消え失せてしまつた。私の処に相談に来られたのはその直後であつた。薬も必要だが、食べ物で消えうせた精力を蘇らせる方法をとりました。この人には植物性のものより動物性のものが効力があるので、魚の内臓や牛豚の脂つこい処やモツなどを食べる様にすすめました。そして、大いに食べる事をすすめたのは淡菜でした。淡菜については、江戸時代にこんな話があります、ある武士が子宝が得られず、すべての希望を失つて、故郷の淡路に隠遁して、百姓になつてしまいましたが、ここで毎日の様に食べたのが、淡菜でした。別に精力増進の目的で食べたのではないが、附近の海でとれるので、喜んで食べた訳なのです、すると2年後に40何才の夫人が妊娠して、男の子を生んだのです。若し江戸に居たら、この後継者は得られなかつたでしよう。図らずも常用した淡菜の効果は素晴しいものであつた。だが人間の慾は限りないもので、男の子が出来て見ると元の武士になりたいと考えるのは人情で、彼はどこかの大名に仕官する目的で、淡路島を出て江戸に戻り、剣道の指南をしている中に、北国の某大名に仕官する事が出来た。そして三百石の禄を食む様になりました。彼は自分の雅号を淡菜と変えたという事です」と書いているし、天皇の料理長秋山徳蔵氏もその著「舌」にミルクイ（海松蛤）は「本朝食鑑」に陽を壮んにす、と出ているが、たいへんな効力を持つているものだそうだ。この水管が非常に効くのである。もちろん、食べるときは全部食べるのだが、この水管だけ乾して、薬用に用いる。老人の陰萎におどろくほどの効能があるものだとある。

カマキリ

薬名を桑螵蛸（ソウヒヨウシヨウ）と云い、カマキリの卵塊を蒸して、乾燥したものである。桑の木の枝に産んだものがよいという。それで薬名が出来たわけである。形態は長さ4cm、幅1cm位で、黄褐色或は黒褐色をなし舟形をしている。薬用としては、陰萎、遺精、情慾亢進等に用いるという。

アオジ

秋よく山野で見かける雀位の緑色を帯びた小鳥である。薬名は漢名そのまま蒿雀（コウシヤク）という。薬用としては、生肉を性的増進剤として用い、尚陰萎にも効があると称せられる。

アカガイ

漢名を魁蛤というが、薬名は魁陸、蚶、瓦屋子など種々ある。よく魚屋の板台で見掛ける二枚貝で、貝の表は黒褐色、内面は白色で、肉は血紅肉色をしている。薬用としては、これも生肉及び貝殼を用いる。栄養価が高く、栄養増進、陰萎、情慾亢進の効を有する。

陽起石（ヨウキセキ）

最後に鉱物を一つ加える、本草と云うからには鉱物も一枚加えて置かぬと工合が悪い。薬名は羊起石、石生、白石、五精金、五精陰茎等種々ある。形態は、白色、灰色、淡緑等で束鍼特の塊をなし、石膏のような光沢があり、柔かくて破砕し易い。薬用としては白いものがよい。陰萎に用いて効があるという。成分はカルシユーム、鉄、マグネシユームなどの硅酸塩である。